

工作教育100年

—— 工作(手工)教育の歴史を通して考える ——

名古屋大学 森 下 一 期

小学校の図画工作科工作の内容・方法を検討することは、手労研の主要な課題の一つです。図工科工作は技術・技能の教育を継続的に学ぶ場として重要な位置を占めています。教科外や種々の教科の中に手の労働を取り入れて、子どもたちが自分の手でモノや自然に働きかける場を設けていくことも、もちろん大切です。しかし、道具を目的に合わせて使いこなしたり、見通しをもって製作する力は基礎的な学力の一つとして育てられなければならないし、その力が他の場面での手の労働の活動に生かされ、その活動を成功させることへ導きます。

しかし、現状では図工科工作の実践・研究は遅れています。教科書や指導書で割り振られた時間を工作にあててはいるようですが、簡単な工作にとどまっています。低学年では紙工作に限られ、高学年になっても、ある程度加工してあって、彫刻と組立てをすればすむようなセット教材を使うといったことが広がっています。工作で、どの学年ではどのような技能や知識を身につけさせるべきかといったことも、十分つめられていません。子どもたちが生き生きと取り組む教材も十分に開発されていません。

モノや自然に直接働きかけることが少なくなり、労働から切り離された現代の子どもたちにこそ、モノや自然へ働きかける方法を手ほどきする工作教育が大切になっています。図工科工作をそういった形で真に子どもの力を育てるものとしていくための研究・実践を早急に進めることが求められているのではないでしょうか。

さて、図画工作科は昭和22年から始まった教科です。それ以前は昭和16年までは芸能科

図画と芸能科工作とに分かれており、更にその前は、図画科、手工科と別の教科でした。図画工作科として図画科と手工科(工作)が統合されてから40年近くたちますが、統合された図工科の教科論が確立されたとも見えず、工作分野が先に述べたような状況で低迷を続けています。統合される以前の手工科、芸能科工作の研究や実践が十分継承・発展させられた様子も見うけられません。

工作教育の内容・方法の研究・実践を深めていくために実践の蓄積がなされている工作教育の歴史から学ぶことも必要です。今年は図工科工作の前身である手工科が設置されてからちょうど100年になりますから、手工科、芸能科工作の歴史から教訓を学ぶよいキッカケとなると思います。

手工(工作)教育の100年はどうのようなものだったのでしょいか。私自身は、これを期に改めて手工(工作)教育の歴史を検討しなおす作業にとりかかっています。しかし、それはまだ緒についたばかりですし、紙数の関係からも詳しくはふれられません。ここでは、大きな流れと、現在の段階で私が考えている若干の問題を出してみたいと思います。

表は手工(工作)の流れを簡単に素描したのですが、ここからいくつかの問題が読みとれます。

- ① 長い間加設科目で、低学年のところまで必修となるには55年を要した。
- ② 手工科発足後十数年はあまり定着しなかった。
- ③ 手工科発足後40年程は実業教育の一つと位置付けられていた。
- ④ 手工科の性格が理科学的なものや、工業の基礎を志向するものと、芸術的志向を

表 手工(工作)教育の流れ(小学校)

明治14 (1881)	農業・工業・商業・加設科目(小学校教則綱領)	(実践十分わからず)
明治19 (1886)	農業・手工・商業、高等小学校(現在の小5から4年)に加設(小学校令)	(M20年代の加設校数不明、但し、石川県では実業科が盛況)
明治23 (1890)	手工科、尋常小学校にも加設できるようになる。	
明治30年前後 明治37年 明治40年代	[この頃手工は実業科の中に位置づく] 文部省編纂「小学校教師用手工教科書」出版 (明治末尋常小学校6カ年となる)	加設校最低、全国で数十校 加設校増え、一万校前後
大正年代	高等小学校、手工農商英兼修できず [理科的手工の主張がでてくる] [創作手工の主張がでてくる]	高等小学校加設校減少
大正15 (1925)	高等小学校に手工科必修。工業科と区別される。	
昭和10年前後	[図画手工の合一論強く出る]	
昭和16 (1941)	芸能科工作、尋常・高等小学校必修 (国民学校令)	(必修となるまで55年を要した)
昭和22 (1947)	小・中学校図画工作科、必修	(図画と工作を統合)
昭和33 (1958)	中学校図工科、美術科と技術科に分離	

するものがあった。

- ⑤ 手工を図画と連絡つけることが早くから問題とされ、合一論も主張されていた。
- ⑥ 第二次大戦後図画と工作が統合され、40年近く経過している。

以上の問題のいくつかについて簡単にふれてみましょう。

工作教育確立のための研究・実践の必要性

表からわかるように、手工(工作)ほど不安定な教科は他にあまり例がないでしょう。手工なり工作として単独で必修科目となったのは、現在の小学校レベルでわずか6年間、中学校レベルでは22年間(技術・家庭科時代を入れても40年間)です。現在においても、安定していないことは周知の通りです。工作教育(あるいは技術教育)の普通教育における教科としての独自性を明らかにし、実践的にも裏づけられた教科論をつくり上げていく研究を積み重ねていかなくては、工作教育の発展は望めません。手工(工作)教育の歴史から導き出される第一の過程は、このことでしょう。他の問題も結局この点に集約される

ものと言えます。

「実業科」の側面から排除されるべきか

手工科設置からかなりの間、手工は農業・商業とともに実業科目(職業教育の科目と考えてよいと思います)の一科目とみなされてきました。加設科目であったのも「土地の状況」により選ぶことができるとしたからです。手工(工作)を考えると、農業、商業と同じかどうか一つの論点となります。高等小学校で手工科が必修となったとき、別に工業科が設けられたことにより、手工は実業科目から脱却し、普通教育科目になったとも言われました。一方、実業科目も普通教育の課程の中に組み込まれています。ここで問題としたいのは、職業に関することを教えることは手工(工作)の中に含まれるかどうかということです。実業科目から脱却したことが、手工科を職業教育と無縁としたとするならば、手工科の大事な部分が欠落するのではないかと考えるからです。普通教育の中の職業教育とは何かが明らかにされなければなりません。私は特定の職業に就くための訓練をする

のではなく、職業に目を向け、その基礎を学んで専門的に進む準備をすることではないかと考えています。現在のように労働から切り離され、職業観が希薄になっている子どもたちに、工作（あるいは技術）教育の中で職業にかかわることをとり上げていくことは重要な一要素ではないかと思うのです。その意味で、第二次大戦前の産業の状況、教育の水準が現在とは全く異なりますから、その違いを踏まえなければなりません。実業科目の一つとして行われていた手工科を再検討してみることが大切だと考えます。明治20年代に実業科を積極的に推進した石川県では、農業、養蚕以外に、陶器画、ろくろ加工などのいわゆる地場産業もとり入れていました。結局は失敗をしますが、それらの取り組みから教訓も得られるように思います。

工作（手工）をめぐるいろいろな主張

一 図画と工作は

統合されなければならないか ―

明治の終り頃から手工科と図画科の関連を緊密にすることがたびたび問題となっていました。ただ、その頃の図画は良い悪いは別として模写や形態を正確に描き表わしたりすることに重点がありました。設計図などの図面をかくというような意味で手工との関連が問題になっていたと思います。とはいえ手工においても工芸的な意味で美術の思想を育むことが課題とされていましたから、図画の美術的な面との重なりも意識はされていたでしょう。

しかし、大正期に芸術教育の思潮が現われる中で、手工の分野でも芸術的な表現や、創造性を重視する考えが出てきました。見本通りにつくるという傾向があった中で、子どもの発想や工夫を大切にすることが主張されたことは大きな意味をもっていました。しかし、創作が強調されると道具の使用や材料の加工法の基本の学習がないがしろにされる傾向も

あり、創作手工の主張がそのまま受け入れられ発展したわけではありません。当時若干の論争もありましたが、現代にもつながっている問題のように思えます。

大正期には、上記のほか理科との結びつきを強め科学的思考を育てる場として手工を考えると、玩具づくりを積極的にとり入れようとする動きもあるなど、多様な取り組みが行われています。これらの取り組みは徐々に手工の教材の中に吸収されていきました。手工科が設置された当初は、外国からの直訳的な傾向が強かったのですが、大正期を通して非常に豊かな教材例をもつようになりました。それらの教材から現在でも学べるものがあるように思います。

図画と手工を統合しようという運動が具体的に行われたのは昭和に入ってからです。建築、デザイン関係の運動としてバウハウス運動というものがあり、日本の図画・手工の教育にも大きな影響を与えました。その流れの中で、構成教育という名称で、図画も手工も一つの教科にまとめられるとしたわけです。この時点では実現はしませんでした。第二次大戦後に図画工作科として統合されてから、この流れの人々が、造形教育を唱えて大きな潮流となりました。

芸術科工作の時代は、戦時であったこともあり、科学や技術が強調はされても、模型飛行機、軍艦といった軍事色の強いものでした。

手工（工作）の内容は、技術や工業の教育の基礎を教えるというものから、図画と一体となって、芸術教育の一部をなすものというところまで多様な主張があります。小学校に限定した場合、工作の活動自体が総合的な面をもつので工作を狭い枠の中にとじ込めることはできないと思いますが、何が中心的な課題であるかを明確にし、構造化することが重要です。第一の問題になってしまいましたが、工作教育の内容、方法の研究を深め、教科論をつくりあげていかねばなりません。